

24 中世哲学·宗教史

24-4 ※中世哲学·国家論

吾々は彼の學說を見る前に一應フロレンツ市の歴史、就中メディチ (Medici) 家の歐裏を通じてマキャヴェリがその為にな力を獻けたフロレンツ史の状況を見つて置かねばならぬ。

元来メディチ家は貴族あつはなく、一年に初めて長老 (Signore) の資格を得、一九六五年にはギンブアルティニが市民守備軍 (Municipal militia) の首領となつた。在紀に入り一三七〇年の革命に當つてはサレ



がエ ストロ・メディチ (Salvatores Medici) が市民黨に推されて (Council) となつた。四二一年穿カニンニ・ティ・スツチ (Giovanni di Bicci) がメディチ家より出て、市民守備軍の頭となつた。その代りには、メディチ家は、ハロウ・ストロツチ (Palla Strozzi) 家と相違んで一流の富豪となつて居る。その穿カニンニは一四二七年の税制改革には貴族黨の反對を押し切つて下層民の為に盡力したところから人望を集め、一人者とした地位に立つた。斯

の如くマイケルは元来市民の出であるが、  
 の主義としてあるも市民的道徳であつたこ  
 とは、<sup>カ</sup>が<sup>ア</sup>に於て子供に為せる遺言<sup>を</sup>見て  
 もよく分る。曰く、「子供等よ、人民の氣に  
 合はぬことは何事も為してはなうぬ。物の分  
 りぬ輩があつても自分か之に對して優越感<sup>を</sup>  
 示して、<sup>彼等</sup>を<sup>我</sup>を<sup>物</sup>を<sup>如</sup>く<sup>に</sup>振舞はた<sup>て</sup>要<sup>す</sup>  
 うぬ。何処までも丁寧<sup>に</sup>話<sup>し</sup>て分るやうに  
 云つて聞かせ、<sup>其</sup>の<sup>行</sup>為<sup>を</sup>改<sup>め</sup>る<sup>や</sup>うにさせ  
 よ。又元老院<sup>が</sup>我<sup>物</sup>如<sup>く</sup>に振舞はた<sup>て</sup>要<sup>す</sup>



ある迄は待つねばならぬ。身を譲り下り、高  
 慢な言葉は避け、人民には平和、市には<sup>安</sup>静<sup>を</sup>  
 加へ、<sup>其</sup>の<sup>行</sup>為<sup>を</sup>改<sup>め</sup>る<sup>や</sup>うにさせよ。出しやあつて夫人の  
 注目を惹くか如き行いもせず、現在の地位を  
 守り、母に孝養を盡せし<sup>と</sup>。  
 一四二九年<sup>年</sup>が<sup>ア</sup>ニ<sup>ニ</sup>の<sup>孫</sup>コンモ<sup>モ</sup> (Cormo)  
 加後と迷い<sup>る</sup>時<sup>に</sup>は<sup>既</sup>に<sup>何</sup>十<sup>代</sup>の<sup>働</sup>き<sup>感</sup>り<sup>で</sup>  
 あつた。彼は各方面に秀れた才能を<sup>示</sup>し、<sup>親</sup>  
 心に家業の擴張に努め、大いにマイケルの名  
 を<sup>尊</sup>か<sup>た</sup>し、<sup>政</sup>治<sup>的</sup>の<sup>方</sup>面<sup>に</sup>於<sup>て</sup>は<sup>依</sup>然<sup>と</sup>して

ス、ローマ、マイラント等にも支店があり、  
 之業の支店は皆独立して所謂子際業、子際  
 金融業を営み利益を各個別に計算してぬる  
 が、全体が一のコンパニオンを形成してぬる  
 ので、一の損は他の益を以て補ひ、一時の受  
 動によつては各地の格業が倒れるやうな事  
 はないやうに出来てぬる。一四三三年に貴族  
 党が勢力を得、マイラント等は一時ローレン

一統御組合特製

「待つ」といふ態にある。當時マイラント等の  
 の財産の大部分は農業地であり、其他に市街  
 宅地を有してぬるか、他に於ては銀行と管  
 み各方面に投資してぬる。之等の事業は名義  
 に於てはマイラント等の事業にまつてぬるか  
 その實は他家との組合であり、例へばブリッ  
 ッケ (Brigge) の支店はギエロツオ、パリ  
 Misoglio Belli) 及びアガニオ、タリ (Spin-  
 do Jaki.) 及びアガニオ (Hong) の支店はア  
 メリゴ、バンチ (Amorfo Banchi) 及びフラン

ツと承はれたが、その一時的な  
 帰子<sup>の</sup>許され、翌々年には市民守備軍の強を  
 とらつた。併し乍らコレは市長の役目を取  
 らず、当時の乱れと政情の空に於し、巧に立  
 廻つて事実上の政治の支配権を握り、その力  
 によつて感に文藝の保護をせしめた。或いはブ  
 ルニエレスコ (Brunellesco) トナテロ (Dona-  
 tello) と交り、或いはミケロッキオ<sup>ミケロッキオ</sup>をいふ宮  
 廷の築造を為せしめ、<sup>ミケロッキオ</sup>シンツと文化の  
 中心とらしめんと努めたり、或いは哲學者、神

神學者、音樂等と<sup>集めて</sup>愛慕した。就中當時トルコ  
 人に送はれたコンスタンチノール<sup>コンスタンチノール</sup>を以て  
 東をザリヤ人の學者を集めてプラトンのア  
 カデミーを建てたことは、後の哲學、物理科學  
 の發展にとつて重大なる意義を有してゐる。  
 一四六四年コレは死し、子供が早逝して  
 居なかつたところから孫のロレンツオ  
 (Lorenzo) が筋を継いだ。此の時代には個人意識は益々  
 強くなつて居り、<sup>全体</sup>以前の如き都市の連帯責任  
 を以てオートとなすといふ事は退し、所謂

一極消滅聯合特製

責任

überschwänglich

を外に、このローマ帝政時代の神話を題材とし、  
 二取上げ、<sup>ガイ</sup>ネポタスの誕生等を描く。なるか、  
 其重風は古代の調和的形式(是はプラトン復  
 興と共にイタリヤ芸術の第一に重んじられ、  
 ぬと)を尊重する風<sup>後述</sup>に大ゆきとす。  
 センチメンタルとなり、上まつた感じを喚へ  
 る。斯の如き一般的風潮に<sup>従って</sup>、ロレンツォ  
 も亦享受を<sup>主眼として</sup>行為した。彼は祖先の職業  
 に忠実ならず政治に関心を有するやうになつ  
 とか、ニヤとてモフローレンツ市の為を思つ

「ルネッサンス人」と呼ばれた自己中心主義  
 者が<sup>登場</sup>登場した。ロレンツォも亦享樂人(Monarch-  
 man)であつた。彼の文芸、學術等に對する  
 嗜好も精神的享受の爲に<sup>乃至は</sup>なされたものであつ  
 て、真・善・美の爲の文芸<sup>乃至は</sup>學術を愛好した  
 のではない。従つて詩に對する趣味も稍、粗  
 野となつて民謡、里謡のものか尊ばれるや  
 うになり、繪畫に於てはボッティチーニ  
 (Gaudenzio Botticelli)の繪が珍重され<sup>る</sup>。  
 ボッティチーニは初めてキリスト教的畫題

マキヤカエリは一四六九年フロレンツの  
 小貴族の家に生れ、人文主義者としての教育  
 を受けとか、元来學者生徒が彼の好むところ  
 であつたところから、彼は實際は作家とし  
 て活動せんもの時期の到るを待つてゐた。  
 一四九二年(コロンバス世界発見の年)フロ  
 ンツオ死するやローマ法皇アレクサンダー六  
 世(Alexander VI.)は息子の左ヤシー、オルジ  
 ア(Cesare Borgia)を用ひて其界支配の野望を  
 實現せむとして次第にフロレンツに没入し

Consul

て為しと云ふよりは、<sup>物</sup>變極りて其(其)界の争  
 動の中心にあつて自己の力を享受せんか為に分  
 せるものであつた。彼は  
 とり市政  
 の中心的地位を占むるに到つたか、市民方に  
 反對の風潮、之が一四七八年には所謂ハツ  
 ツィ(Pazzi)の乱と云つて爆發してその<sup>併し</sup>は所謂ハツ  
 不成功に終つた為にはロレンツオは更に大なる  
 努力を得、彼自ら元首の地位をとり<sup>ダイラント</sup>独裁者ま  
 とまつた。マキヤカエリの活動は此の時代に  
 初まる。

まで進ん人向中心主義、享樂中心主義を罵  
 刺し、人向生活は来世の生活の爲にのみ意義  
 を有するといふ神棒本位の立場を高調した。  
 其の  
 此れのみならず彼は既に世俗化せる法皇政治  
 に政變の矛を向け、法皇の神人向の仲介者た  
 るの地位を否認し、又最後の審判の恐ろしさ状  
 態をありと描き出して市民をして人間の  
 罪深さにと自覺せしめ、フロレンツを一  
 の修道院とらしめむとした。此向に先述のロ  
 レンゾの孔かありフロレンツの人心動搖

一 政治小説の発展

来リ、スペイン、フランスも其勢力を増かし  
 来つて、イタリーは再び内争争議の中心とす  
 る趨勢に立ち到つた。斯くも際状態の變化か  
 らフロレンツが外に勢力をおよぼさされ、  
 人心樹くメフィケ家を離れむとした。この時に  
 フロレンツの街に驚くべき出来事か<sup>之に附加して</sup>  
 と。是説教僧サゴオナローラ (Girlandino Savonar-  
 ro) の出現である。彼は一四九〇年にフロ  
 レンツに来リサン・マルコ (San Marco) の  
 修道院に定住し、フロレンツ市民の極端上





(8) ?  
三  
三

支配するとなりし、在来の歴史的傳統及び勢力を  
 一掃して十人の専断に最高主権を與へるこ  
 とにした。此以後は一時は燦原の火の如き勢  
 力を得、獄舎の開帳、積澤の焼却等まじりも  
 行し得たのであるが、余り極端に走つた為  
 人民の反抗を買ひ、之に乗じてローマ法皇の  
 干渉<sup>等があつた</sup>あり、一四九八年五月廿三日にはサカ  
 ナローラは焚刑に処せられた。此時から再び  
 フロレンツは實際的政治家の支配するところ  
 となりつた。

せうに乘じて、一四九四年にはルネサンスの  
 光<sup>が</sup>イタリアに浸入し来り、先づマイラント  
 を誘<sup>ひ</sup>其独裁政治家を倒して平民の自治に  
 よる佛系黨の政府を立て、フロレンツ市に  
 對しても同様の宣佈を行つた。その中におい  
 かさぬ市民は一四九四年十一月メデイ  
 を逐ひ、フロレンツの自由市たることを宣  
 言した。<sup>斯くの如き</sup>サカオナローラの指導の下に神権政治  
 (Theocratic and demeritische Grundlage) を布き、  
 神が修道僧を通じて直接にフロレンツ市を

フロレンツカ再びメデイチ家の支配下に  
 服するに及び、彼は自らの職を失ったのみ  
 らず、メデイチ家及びその隠謀に参画したとの疑  
 いによつて下獄し、橋内の責苦までも受けた  
 が半年余に亘り出獄した。が、伴フロレンツカ  
 内に住むを許され、一五一三年の夏には祖  
 先傳來の領有地であるサン・アンドレアの山村  
 に引越して不遇な生活を送った。此の時代に  
 拾ける彼の生活は、付フロレンツカ、空ト  
 (Francesco Sestini) に宛てた手紙から窺ふと大体

一橋洋行組合特製

Secretary

マキヤウエリカセ九才にして十人委員會の  
 書記に選ばれるのは此時である。一五一二年  
 に至る十四年、彼は熱心にフロレンツカを  
 に盡し、属外をに使臣となつて政治の實情を  
 視察して廻り、傭兵の代りに兵民の制を以て  
 けり。等の實際的事蹟も頗る多かつた。彼は此間  
 に冷静に事態を觀察し、力の所在を明らむる  
 の能力を養ふと共に、非常な熱情を以てイタ  
 リヤ統一の理想を懐くやうになつたのである。  
 ところが一五〇二年には再び、入

儂かニ、三鉄のことで大喧嘩をする。それか  
 ら夕方迄くおに帰ると彼にとつて最も愉快な  
 生活か知れる。居間に退いて平常着を脱ぎ換  
 へ、一番上等な衣服に着替へて古人の書を讀  
 み、古人と交る。就中カリシヤ、ローマの  
 史家達は最も親しい伴侶である。斯くの如く  
 して四時中位の子は俗を忘れ、貪を忘れ、  
 死の心配すらも忘れて清浄の生活に入る。其  
 中に筆を操り、古人との交通の事になる。一  
 を書きしめる。

君主論 (De principe)

一橋清葉組合特製



次、如くものとなり。日の出と共に起出  
 一、林の中に行き、木を切り出す。見ると  
 リ、二時中位木挽等と他もな話をし  
 てから、泉のほとりや草原の上でカンテやハ  
 トウシカ、サマはオウイ、ウイ等の戀物語  
 に讀耽る。林の仕事が終るとローム街道の茶  
 屋に出で、旅行客を捕へてお茶を請ふ。

單に晝飯を済ませると再び茶屋に行つて居合  
 せ。名を相手に賭事をして遊ぶ。相手はいつ  
 も花籠屋の親爺、粉屋、煙草焼き等の。

とも彼自身は自己の討論を直に実行に移し得るものと信じてゐた。

一般にマキヤガエリが (Machiavellismus) と云へば、暴力に依つて人民を治めることを以て事とする不道徳なる主義として考へられ、  
 二居リ、つりとり、ヒ大王 (Friedrich der Große) 等も「反マキヤガエリが (Anti-Machiavell)」に於て彼の説と作難いところを併し乍ら果してマキヤガエリの學説は一般に云はれてぬる如く不道徳なるものであらうか。

「リヴィウス論 (Lissoni sopra la prima classe di Stato civile)」等の名著は斯の如く生活の間に書かれものである。つまりマキヤガエリは其職を失つて己を所得知人文筆義者としての生活に入つたものであり、其間に彼の旺盛なる行為慾、活動慾、及び時を傾向を改めざる生活態度が現はれると思ふ。「君主論」リヴィウス論等は何かもメテイヤ家の君主に用いられたが為に書かれたものであり、其議論も全く政治の實際を論じたものであつた。かく

底にて主張せし、在来の政治學說が道德、  
 而も個人道德を以て政治的問題を律し、理想  
 を以て現實を見失ふの愚を指摘し、君主たる  
 ものは現實の明白なる認識に基いて其目的に  
 合する政策を講ずべきであり、必要とあらば  
 不道德な方法を用ふるのも己を得るゝとな  
 してゐる。彼は云ふ、  
 「  
 通自在の心構へをもつてゐる運勢の風の吹烟  
 しごの變化に應じて思ふ存分に振舞ひ、  
 既に申述へたやうに、必要とあれば善道と競

者々は所謂「マキヤヴェリスム」と實際にマ  
 キヤヴェリスムの説ける學說を一應分離して考  
 へ、<sup>専ら</sup>後者につかへ考察して見よう。マキヤヴェ  
 リの學說が普通に暴力主義と解せらるゝも  
 全く故のないことではなく、現にマキヤヴェ  
 リは「君主論」第七章に於て左に於て、お  
 ルカPを例に引き、彼が天下を治める為には暴  
 力と奸計とを用ふることを以て單に非難して  
 ゐる。いはかりではなく、<sup>彼は</sup>其意を賞讃して居  
 る。又此の考へ<sup>を</sup>十六、七章に於ては更に徹

所かマキヤ空リを以て降るる暴力論者と解  
 せしめ、フリートとてニ世帯として政論を  
 書かじめた所以であらう。マキヤ空リの政  
 治論は在来<sup>主として</sup>實際の政治家もしくは政治論者に  
 よつて論議せられ、之を論ずる態度もマキヤ  
 空リが君主論に於て示唆する政策が果して  
 実効ありや、<sup>批判者の時代の</sup>又は小が正義の理念に合するや  
 否や<sup>と</sup>問題あり<sup>と</sup>た。従つて所謂マキヤ空  
 リ不<sup>と</sup>なる觀念がマキヤ空リなる人格、彼  
 の他の著作、乃至は歴史的事情から切離<sup>し</sup>

多かた氏譯による  
 多かた氏譯による  
 (多かた氏譯による)

小るはかりでなく進んで要道に踏込んで行か  
 ねばならぬことである。<sup>(多かた氏譯による)</sup>  
 と。併し乍ら存するものは之に依つて人望  
 を失ふことのないやうに氣をつけ、表面は何  
 処までも道徳的に振舞ひ、政治に<sup>上の利害</sup>大なる関係  
 なく限り自己の利益を捨て、氣がよくなる振舞ふ  
 ことか肝要である。但し事一國の盛衰に關す  
 る場合にはけちな振舞ひ<sup>禁</sup>、暴多等も敢て辞せ  
 ず、<sup>大</sup>總じて毀譽褒貶を超越せねばならぬ。  
 此<sup>の</sup>如くマキヤ空リは論ずる。之等の<sup>個</sup>

論  
 せら  
 小こ  
 のた  
 もの  
 があ  
 る。之  
 に対  
 してマ  
 キ  
 ヤ空  
 リの學  
 說を通  
 してイ  
 タリヤ  
 の文藝  
 復興の  
 特色。進  
 んでは  
 イタリ  
 ヤの國  
 民性を  
 窮めむ  
 とす。吾  
 々は、か  
 かる批  
 判の態  
 度を去  
 つて彼  
 の所論を  
 彼の格  
 かう。乃  
 至は當  
 時の「史  
 的事  
 情から理  
 解し、」  
 「君主論」  
 以外の著  
 作との聯  
 関に注目  
 して、マ  
 キヤ空  
 リの思想  
 を全体と  
 して理解  
 することに  
 勉めぬ  
 べからざ  
 り。

は全く実  
 理主義的  
 に見ざる  
 やうな言  
 説を為し

こゝろマ  
 キヤ空  
 リは、同  
 書第二章  
 「イタリ  
 ヤを取  
 り戻し之  
 を表ら  
 の手から  
 救い出す  
 やうに  
 幾め致す  
 こと」に  
 於ては祖  
 父イタ  
 リヤの自  
 由を高調  
 し、之を  
 實現する  
 の大任は  
 大抵「千  
 字」にあり  
 とすし、  
 又その為  
 には兵制  
 を備へる  
 子民軍に  
 替へねば  
 ならぬと  
 主張し、  
 最後に「  
 トウシカ  
 の魯不  
 討を引  
 いて全  
 卷を讀  
 むと云ふ  
 理想主義  
 的の傾向  
 を示して  
 ぬる

徳は蠻  
 虐に抗し  
 て  
 打物と  
 りて直  
 ちに戦  
 はん

君主論は君主の絶対支配を主張するに對して、リベラス論は共和制時代の自由を讚美してゐる。之と同様の矛盾はマキヤヴェリの生活の間にも觀ゆる。十五年の共和制体のフローレンツの爲に奉仕し國民兵の制度と主張せる彼は、マキヤヴェルが再び主權を奪うに及んで君主論城塞論を著して用ひられんことを求め、更にマキヤヴェルが承はるゝに及んで共和制に職を求めぬ。斯の如き事實を眺めるとマ

一統御國分特製

是は古への勇氣  
 イタリヤ人の心ぬちに未だ此せあるか故にニシ。  
 斯の如き独裁君主本位論考へと但ち正義、即ちイタリヤの自由独立を高調する考へとは如何にして両立し得るか、現実を冷靜に觀察しつゝ、猶理想的なるものを重んずる態度は如何にして成立するか、此の困難なる問題は去々かゝる君主論とリベラス論とを見較べるときにも著しく注意を惹く事柄である。即ち



精力的に運動を求めマキヤが  
 勃然と云い得る彼の懐いぬる理想  
 は共和制、君主制の対立を越えてイギリヤ  
 家を統一するにあつた。二のことは公平に見  
 て承認せねばならぬと思ふ。而して両者を越  
 越する方法は、實際政治として現狀の情勢  
 をありのまゝに認識すると云ふ傾向に、人文  
 主義者の理想を附加することによつて見出さ  
 ぬのである。即ち一方に権威政治戦争経過  
 の各方面に於て隆盛の地位に達するには個人

キヤウエリなる人物は如何にも世節操を田力  
 あり、自己の榮達の為には其方法を選出する  
 人自づから其學說をいかに必要に應じて隨  
 時変更する便宜主義者<sup>であるが</sup>如く見ざる併し乍  
 ら吾々は之を以て直ちにマキヤ空りの學說  
 には何れ統一かといふものと連射するわけには  
 行かない。勿論彼が友人に宛てた手紙から判  
 断しても、彼が「君主論」を人々に手紙に奉  
 つた個人的動機には自己の榮達を求むる念が  
 混入してゐたことは事實であるが、之とも

の偉大なる力を必要とすることを見ると同時に、<sup>他</sup>共和時代のローマを理想とし、<sup>説</sup>國家が隆盛になるには各市民が全体の爲に盡す犠牲的精神即ち市民道徳が必要なるを<sup>見</sup>共和國の理想は支配者の力と<sup>絶</sup>制の力とによるに於ては實現し得らぬとなしと。而してローマの如き理想的國家に於ては法制によつてのみ理想的狀態は維持せらるるが、當時のイタリア諸都市の如き衰へた世和子に於ては個人の<sup>力</sup>支配によつてのみ市民道徳が再興<sup>せらる</sup>と考へての



である  
事實彼は徹頭徹尾フロレンツ本位の<sup>評</sup>論者であり、彼の生涯はフロレンツによるイタリア統一の<sup>熱</sup>情<sup>情</sup>によつて貫かれおそと称し<sup>し</sup>ても差支へない。彼の「フロレンツ史」は自市の光榮ある歴史を<sup>書</sup>いて市民の愛子心を授けむか爲に書かれたものであり、又「カストルツカオ・カストラカニ」Castellani) 傳はイタリア統一の<sup>熱</sup>望から一人の有力な君主を理想化し、イタリアの救

清は只実力あり、形勢を明察する能力ある君  
 主によつてのみ行はれ得ることを説いて宣傳  
 書である。而してマキヤ空りの見をフロ  
 レンツ市は団体として文化子弟であるか  
 らの隆替は懸つて支配者の伎倆にありとせら  
 れる。即ちマキヤ空りにそれ自身独立せる実  
 体と考へらゆと都市カローマ式に支配者個人  
 によつて具体化せらゆと格構があつて、教会  
 の構造と同一傾向にある。又各市民の利害は  
 相一致せらるる故に、或る力と以て之を抑へる

必要ありと云ふ真に於ても教会の傾向に於  
 るが、各々は先にトーマスの國家觀に於て、國  
 家とはやりしやに於けるか如く市民の適當な  
 る配置に即して存するものではなく、國家は  
 市民を包含しつゝも而も其上に立つて之を支  
 配するものなることを見ることがマキヤ空り  
 に於ても之と同一傾向の思想を見ること加出  
 来る。只トーマスに於ては市全体は神に對す  
 る責務を有するものであるに對して、マキヤ  
 空りは偉人なれ自身が価値ありとする人格

主義、英雄崇拜主義に基いて學說を立て、居る。偉人は神にも比す可い絶対支配者としての地位に置かれる。此の所謂君主道徳が説かれ、これと見るとも出来よう。然るに治めらるる者の道徳は如何。彼へ向へによれば、吾々は處生の規範を求め、是つて理想もしくは希望によつて現実を見誤つてはならぬ。人々が今現に如何に生活しつゝありやの事實に基いて如何に生活すべきかの規範を定めねばならぬ。此見地より事實を観察



すば人皆自己の幸福を求め居る。之歎情の自然である。而して吾々は其興へらくは素質を充分に發展し得る時に初めて其幸福なるを感ずる。此幸福を目標として力強く活動する。ことか即ち *virtus* (徳、力) *virtus* には此の兩義がある) である。マキヤヴェリにとつて重要な概念とする *virtus* とは、人間が自己の中に有するところの徳乃至は力なり。素質を充分に發展せしめ、其素質と解して良からう。斯く人間の幸福は人間が自己の力を充分に發揮した時に得られるのである。 *virtus*

ぬやうな状態に導くことは只上に立つて全体  
 を見通すの能力を持つて明智なる君主のみ  
 為し得るところであり、其のよきまゝ 常人は只必要に迫ら  
 ぬと初め善を為し得るものであるから、今  
 日の如き衰へたる共和憲制の時代に於ては力強い  
 國君か上にあつて刑罰と宗教と法律とを以て  
 市民を強制して其の意志を高むべきである  
 即ち眞の意志は只多数の力によつてのみ作  
 らるべきであると主張するのである。

一 徳意志の精神

眞の幸福は得らざるものではなく、眞の幸福  
 が得らざる為には各個の意志は「秩序づけ  
 うれと意志 (Willen ordinator)」とならねばな  
 らない。蓋し各人が自己の欲するがままに自  
 力を展開する場合に其間には衝突があること  
 は免れず、自然の状況より組織立つて市民道  
 徳の秩序に整理せらるることによつてのみ眞  
 の幸福が得らるからである。斯の如く力を  
 発展せしめて而も調和ある組織の場外に出で

リ之を守りたりあるか、只之を守ることか  
 國家の利益に害ある場合には之を許せよと云ふ  
 のである。善は何処までも善、悪は何処までも  
 悪であるか、國家の爲め必要ある場合には強  
 ひて之に拘束せらるべきはなからぬと説くのであ  
 る。要するに在來の倫理が個人倫理であつた  
 のをマキヤガリは其上に國家と云ふ無上の  
 価値を認め、云はば社会倫理に重きを置き、  
 個人倫理の善悪を社会倫理の下にに属せしめむと  
 してと云ふ可きである。斯の如く在來教會の

斯の如くしてマキヤガリは共和主義と君  
 主義との矛盾を解決したのみならず、進ん  
 で事實と理想との間の矛盾をも超越した。蓋  
 し彼が非道徳家として非難せらるゝ所以は先  
 述の如く關係は自己の地位を維持する必要あ  
 ると云ふは悪業を敢て爲すことも許さる可きで  
 ある、否悪を爲し得る能力あることが必要で  
 あると説いた所に存するのだから。併し乍  
 ら彼は無條件に道徳と度外視せよと云ふので  
 はない。在來教會の教えるところは守れる限

するものごめかり、その説くところの勇氣の如き  
 も他より壓迫せられし時に之を我慢するわけ  
 のもつて、積極的<sup>のモチ</sup>に新價値を開發する底の勇氣はな  
 いとして、大膽にキリスト教自身の價値を貶  
 下し、斯くして彼は個人倫理の絶対價値を  
 否認し、各個人の相對的價値を認めつゝも、  
 之を君主によつて具体化せらるる國家の價値  
 の下に從屬せしめたる。つまりキリスト教が神  
 聖の價値抑へてなすものゝ、再俗的なる君主と  
 云ふ個人に替へたものごめあり、是により君主

権威組合特製

權威の下に保持せられし個人倫理を世俗的社  
 會倫理の下に從屬せしめ得る為には先づ教會  
 の權威が破られねばならぬ。理月彼は大膽  
 に之を行つた。先づ彼はキリスト教  
 の教小るところの謙遜の徳は彼の云ふ *Wohl*  
 に反するところから全然之を否認する。次に  
 徹底的に教會の神制なるを否認し、其教儀も  
 僧侶が自己の利益の爲に勝手に造つたものご  
 めつて天啓に基くものごめはなれしとす。總に  
 てキリスト教會の教小る倫理は極めて消極的



此の価値を有する主体とするギリシア風の文  
 化國家の系へは之を認めて保持する。而して國  
 家は君主なる個人によつて具体化せらるること  
 見るところから、個人の本性を觀得すること  
 によつて國家の本質が明かにするところから、  
 ると信ずる。併し其個人の本性を求むるに當  
 つては、自己の精神生活を内省することにより、  
 直接に體驗せらるる自己を捕捉せむとするも  
 のではなく、社會生活の中に組み込まれ、自  
 己を云はば自己に對立せしめ、是を外から觀

の權威が絶對化せられ、偉人の存在によつて  
 支配せられ、このことと同時に義務であることせら  
 れるに到つた。  
 以上述ぶるところより見れば、マキヤヴェ  
 リの子弟觀は、國家は市民に存して子弟は存し下ら  
 ず、而も其上に立つて之を支配するといふ特殊の  
 あるものであることかかふる。オニに吾々は彼  
 の考へ方の間に一種の自然科学的方法を認  
 めるのである。惟小にマキヤヴェリは、ロー  
 シンワ市其他の都市子弟を以てその自身獨立



此を求めらるゝ型の一例として取扱はれる。  
 彼の『史の主眼とするところは人類の発展を  
 説明せる『史哲學的觀察』も、イタリヤ・  
 フロレンツ等の統一的發展史でもなく、さ  
 らばこの個々の事實の關係（例へば因果的關  
 係）の間に數學的法則を求めむとするもので  
 もない。彼は歴史的事實・人格の觀察を通じて  
 或種の形勢、~~或種~~の人格の型を見出さむと  
 してゐる。此所に客觀的に格も事柄の  
 構造を見むとす。イタリヤ文化の特色が表れ

察せしむる。即ち所與の社會現象から出立し、  
 東西古今の政治的事實を觀察し、其等と比較  
 分解することによつて其根柢に潜む人性を觀  
 得せむとする。此觀得の手法に特色がある。  
 彼は今日の自然科學の如く個々の現象を其擔  
 ひ手から切離してチリチリにわけるものと  
 見、是を一定の見地から觀察して體系を造ら  
 せむとするものではなく、出来事の型 (Typen)、  
 明君の行爲の型を古今の歴史を觀察してある  
 由に求めるものであつて、具體的事實は断く



である。而して斯くして求めらるる君主の  
 人性、従つて之に依つて具体化せらるる、都市  
 の本質は、時により所によつて異なり、單に行為の  
 参考として研究せらるる如きものではなく、  
 永久不変のものとして、評価等は此本性より推  
 論せらるる、規範に従つて安心して行為し得る  
 底のものである。  
 越え場を超越し、  
 せらるる。是は現象の観察の間に永久不変の  
 イデオを求めらるるポラトンの態より発生する  
 神聖なる相の施設は時代を越



信念であると思ふ。要するに在来不可捉と考  
 へらるる神にも相当するべき事乃至は君主を、  
 歴史の観察の間に出来るだけ明白に典型化し、  
 理性の力で是を捕捉せむとせしものである。  
 斯の如くヤキヤ空りには子家及君を専ら本  
 質と理性の力によつて把握せむと努力し、之の  
 であるか、彼は依此非合理的な存在と認めら  
 るを得なかつた。之運命 (Fortuna) の考へが  
 ある。既述の如く彼はあらゆるもの支配せむ  
 とする個人の力を高調し、是をそれ自体に於

を減す。此の際吾々は慎重に過ぎるよりは、  
 寧ろ勇敢の方がよい。何となれば運命の伸は  
 女どからである。マキヤ望りば云ふ「よく  
 考へて見ると控目にするよりも勇敢な方がい  
 い」といふのも由來、運命といふものは女を  
 のぞから、これをとおしなくさせしおきまけ  
 りは是非とも撲つてリ突き飛ばしとリしなけ  
 りばならぬ。しかも見たとこる運命は此の  
 手で行く方が冷やかに構へて事を運ぶカリ  
 不よりも樂に征服し得るやうだ。さすればニ

一機消算組合特製

価値を有する *Value* と見るのであるか <sup>併し</sup>個人  
 の力を以て何事とし爲し得るものとは考へな  
 かつた。吾々の *Strength* を超えて運命の力を承  
 認せざるを得なかつた。吾々の一生は此 *Strength*  
 と *Fortuna* との戦争である。吾々は自己の力を  
 以て何事をも爲し得るものではないか、され  
 ばとて全く運命の激流に流されし生ふもの  
 でもない。吾々の仕事は吾々の力を以て運命  
 と闘ふにある。吾々が運命の力をよく洞察し、  
 之に巧に順應する時は成功し、然らざれば身



せられ、~~カ~~時占星術の形をとつたか猶ほいと  
 ト運命の神の崇拜は継続し、戦争等の際に  
 は特に崇拜せられた。キリスト教が成立する  
 に及ばぬの魔神は悉くエホバの神に征服せら  
 れ、在来の運命神崇拜は極端に排斥せられた  
 (アウグスチヌスの「神の國」を見よ)。キ  
 リスト教がゲルマン人の世界にも傳はり、  
 ルマンの諸神が或いは天使、或いは魔神の形  
 でキリスト教に包擁せらるゝに及ばぬ、運命も  
 神の使となり、自隠しをした女の天使として

一 種 演 義 組 合 特 製

人間は勇 敢に運命と  
 戦ふことによつてのみ  
 支配することを得る  
 うである。

女と同様、よは若者の友達なのである、と  
 いふのも若人たちはさほど用心深くはなく、  
 寧ろ頗る勇猛果敢に運命を支配するからであ  
 る。と、~~此~~は運命の女神とは如何なる系譜  
 を有するものであらうか。  
 此の運命なる考へは永い「史前運命」を有す  
 るギリシャに於ては運命 (Tyche) は才  
 リンピヤの神の力を以てし、如何とも  
 十力からぶるものと考へられた。次いで  
 マ時代には運命は氣儘な神として一般に崇拜

141

大きな車を廻る。是に依つて世俗界、物質界  
 の有為<sup>カガミ</sup>を惹起す此の<sup>カガミ</sup>と来へらう。此亦  
 へによつて世俗界の腐爛<sup>カガミ</sup>等、得喪は盲目  
 神の司る偶然<sup>カガミ</sup>物事ものに過かた、是に執着す  
 ることの無意味なることを示して、<sup>人</sup>真の神に  
 對する信仰によつて永遠の生活に入る可き  
 あることか勧めらる。此意味は教会の入口  
 の上等に車輪が描かれ、十二世紀になると教  
 会の中に車輪の画が描かれ、又は機械仕  
 掛の車が自動的<sup>カガミ</sup>に動くやうに仕組まれとりし



142

此教訓の<sup>材料</sup>は用いられた。ぬ。ゆか中世  
 前期に於て<sup>カガミ</sup>世俗生活が重んじられ、帝王貴  
 族等の浮沈が世人の注意を引いたところから、  
 運命神に對する信仰復活し、古代の運命神觀  
 を生かして来た。譬喩を以て其力を説くやう  
 になつた。其最も著しい例は十二世紀のポロ  
 トルネッ<sup>カガミ</sup>サンスは時代に出たアラス、テ、イ  
 ウリス (Planus de Quercus) である。彼は  
 其著「アステク<sup>カガミ</sup>クウクア<sup>カガミ</sup>ア<sup>カガミ</sup> (Ante-<sup>カガミ</sup>Evolution)  
 に於て新人 (絶對に完全なる人間) を造り出

十訓<sup>を論</sup>の神を不統一な  
 るものに統一を興へる力<sup>を有す</sup>をもつて  
 描き出し、神と協方して自然及び徳 (Virtues)  
 に新しい性質を興へるものと為してゐる。中  
 在に於ても世俗生活が益々専らせらるゝに従  
 つて運命の神は注意の焦点となり、此在に要  
 の存する所以、不義不悖理の<sup>跋扈</sup>する所以<sup>に</sup>  
 疑惑<sup>を</sup>興へる程、運命の盲目的な力  
 を専らし、是に對して人肉の自由を求め、或  
 いは是と妥協し、或いは是と争つて其支配を



免れぬとする慾望が激しくなる。在来は國王、  
 貴族等<sup>の</sup>運命に關してのみ運命神が専らしく  
 であつたものが、中世が進出に従つて一般の人  
 民も自己の運命を心配するやうになり、運命  
 神が<sup>庶民の</sup>注意の集積となつて来た。或いはこれを合  
 理的に捕へむとして占星術を發信し、或いは  
 魔術を以て其力を左右せむとして。パトロン  
 力も亦此運命神の方を認め、人間の力が是と  
 競争の地位に立つと云つてゐる。此の如く  
 十訓<sup>の</sup>神と専らしく

運命は

勿ち出しやばつて来る。従つて運命を支配し  
 ようとするには、<sup>運命</sup>を選擇して勇敢に之と  
 戦はねばならぬ。併し乍ら運命の神は狡猾  
 な女神であるから單に力だけを以て當つ  
 ても之を支配し得ぬ。同一の事を為しても甲  
 の場合には好結果を得らねば、乙の場合に  
 は悪結果を生ずる。故に運命に打克す志とす  
 る場合には、よから其の動向を見通し、此方も  
 狡猾に立回らねばならぬ。 <sup>運命</sup>が <sup>運命</sup>  
 と戦ふ為には大膽であり勇敢であることと必

<sup>運命</sup>神は此方が強くあると引込むか、弱  
 くあると出りやばつて来る。 <sup>運命</sup>神の廻す車  
 は數個あるから、一つの車に乗つて最高<sup>運命</sup>の地  
 位に立つと時、即ち下り坂に落ちぬ中に二  
 の車に飛び乗つて再び上り口にとりつかねば  
 ならぬ。 <sup>運命</sup>神は前類には毛を有する故、之  
 を捕へれば擱へることかあるか、後頭は  
 危であるから時期と失すれば危を捕へること  
 かあるか、強<sup>運命</sup>なつてしまふかのである  
<sup>運命</sup>神は弱く出れば引込むか、強<sup>運命</sup>くあると



要とするが、その大膽さには常に合理的に事  
 物を計算する能力が伴はねばならぬ。彼の理  
 想とするものは、<sup>ローマ</sup>共和制の復活、<sup>ローマ</sup>プロンツ  
 市の隆盛を實現せむが為には、盲目的なる詭力  
 を統一せしめ、運命に順應し、<sup>ローマ</sup>それを制御せ  
 ねばならぬ。此所にマキヤヴェリにとつて重  
 要なる概念たる必出 (necessita) なる者、か  
 生じて来る。

マキヤヴェリの necessita は頗る捕捉する  
 に困難な概念であるが、マキヤヴェリは、<sup>ローマ</sup>

fortuna 及び未だ秩序づけらねたる <sup>ローマ</sup> <sup>ローマ</sup> 故に  
 混沌たる二力と考へるとは、<sup>ローマ</sup> 故に進んで、  
 fortuna と對ふに際して、<sup>ローマ</sup> <sup>ローマ</sup> 及び fortuna  
 に秩序を興へ、<sup>ローマ</sup> 其間に或る合法則性を見出  
 さむとする。此の<sup>ローマ</sup> 見出さむる必然性が  
 即ち necessita であるといひ得よう。necessi-  
 ta に適つて、戦術を用いることによつて、<sup>ローマ</sup> <sup>ローマ</sup>  
<sup>ローマ</sup> <sup>ローマ</sup> は fortuna に勝ち得るのである。即ち  
 統一せる理想を持つて偉人が其所信と実行す  
 るに當つて、意味の甚るる体系即ち理想が、<sup>ローマ</sup>

要とするが、その大膽さには常に合理的に事  
 物を計算する能力が伴はねばならぬ。彼の理  
 想とするものは、<sup>ローマ</sup>共和制の復活、<sup>ローマ</sup>プロンツ  
 市の隆盛を實現せむが為には、盲目的なる詭力  
 を統一せしめ、運命に順應し、<sup>ローマ</sup>それを制御せ  
 ねばならぬ。此所にマキヤヴェリにとつて重  
 要なる概念たる必出 (necessita) なる者、か  
 生じて来る。

マキヤヴェリの necessita は頗る捕捉する  
 に困難な概念であるが、マキヤヴェリは、<sup>ローマ</sup>



十といふ義に解せられよう。彼が市民の道徳  
 心は只 *necessita* 故らのみ発生する、  
 即ち困窮  
 分けは善行をしよいと述べてゐるのも、個  
 々の市民は口で説いては秩序ある状態  
 は出来上りぬから、刑罰其他の方法を以てさ  
 うせざるを得ぬやうな地位に置くことによつ  
 て必然的に善行をさすやうになる、と云ふ  
 意義  
 がある。又君主は不善をも為し得る能力  
 を持つべからぬが、但し此不善は *necessita*  
 ある時のみ行ふべきである。結極

一應消費組合特製

現<sup>直ちに</sup>実を判断してはならぬ。意味の考察は存  
 在の体系に統合せられねばならぬ。その為  
 には人間界の出来事を *virtus* と *fortuna* の二  
 力の交渉より成立するものと観じ、両力の必  
 然性を前者の冷静な考察——強ひて云へば理  
 性の力——によつて捉へ、之に依つて理想を  
 実現すべく *virtus* を働かぬべからぬ。  
 マキヤ空りか *necessita* 多たところ *virtu-*  
 性、も亦大なり。』と云つてゐるのは、*necess-*  
 性、に從つて支配すべし *virtus* も其效力を益



の間に法則を求めると同一方向にある。V  
 オナルドは空中を飛行せむとす。目的を以て  
 鳥の翼の浮力、紙の滑走する力等を分析して  
 のと同一傾向にある。此等を徹底的に進めて  
 行けば國家生活に關する自然科學が出来るや  
 うに見えらる。即ち *necessitate* をおむる理性を考  
 へて見たるに、  
 所以は、理性の見える法則が 神の働き若しくは自然の本体と  
 同一視し得べきものと見做さずか故であ  
 る。斯く見れば在來教會の權威によつて維

斯く考へれば *necessitate* とは支配者と被  
 支配者——其理 一般的に云へば自我と作我とを對  
 立せしめ、自我が作我性の力を以て作我に定  
 立し、法則と云い得べく、理想を實現せしむが  
 爲に現實の世界を因果的に 捉へつけしむるのであると云  
 う得る。此所にマキヤ空りの技術者の傾向  
 が表れてゐるのであつて、其態度は自然科學  
 發生當時の技術者が自然を支配する爲に自然

石玉は

行動し己を得ざる場合には要とする

所與の事情を明察して其必然性に従つて行動  
ニして得ざる  
 不可しとの義に解すべしである。

中やカエリが *necessitate* を求めたり、人間を  
 行為に分解して其間に因果的合法則性を求め  
 ることをなすが、前述の如く(國家乃至は君主  
 の型を求めると云ふ)分析を取つたことは、<sup>彼が</sup>  
 人間的現象を取扱ふ骨、若くは其を有してか  
 ら二ことを示すもので、此意味に於て彼を近世  
 に於ける社会科学の鼻祖と云ひ得るのである  
 以上によつてイタリヤ文藝復興時代の實際  
 政治の思想を代表するものとしてマキヤヴェ  
 リの國家學論について述べ、之を通じてイタ

生理學的に見れば人間は  
 動物性・植物性の親戚から  
 理解し得るものである。  
 多量な本能を以てしては  
 人間の価値を定むるべき  
 理解するに足らぬと  
 断言する。

持せられたる超自然的規範の代り、吾々が  
 經驗的在界に於て最上、価値とする必要を維  
 持し形成せむが爲に<sup>理性の力を以て</sup>超自然的法則を求め、<sup>得</sup>  
 とになり、其処に必要論の世俗化 (*Seculari-*  
*zation*) が行はれる筈である。マキヤヴェリ  
 は現に此世俗化を遂行してのこあるか、人間  
 を個々の行為に分解して其間に機械的必然性  
 を求めると云ふところ迄は進まなかつた。  
 人間は、<sup>人間は</sup>行為は価値の定立を必ず伴ひ、<sup>人間は</sup>単なる  
 自然的事件とは異つてゐる。

を主とし、其天竺によつて現在を理解せむと  
 してのに根拠して、文藝復興期のイタリアや人達  
 は遂に人間界自然界の構造から立し、其  
 理想とする理念の在界を神の在界に投映せむと  
 して、懐するにイタリヤ文藝復興は人間中心  
 主義の復活と云ひ得べく、ユカヤの神本位の  
 傾向を漸次押へて行く趨勢の極まるころ、マ  
 キヤダリマキアヴェリの如く神界を念慮の外に置か  
 現世の状況から出發して國家興衰を立こむと  
 い、遂にカトリック教會を代表するローマ法

一紙前集組合特製

リヤの国体意識、乃至は國民性を窺はむとし  
 たのであるか、其結論を要約すれば次の如く  
 なるであらう。  
 (一) イタリア文藝復興の時代には  
 フ教の中に包含せられ、カリヤ文化の要素  
 が高調せられ、<sup>その</sup>本末不可知のものとならぬ  
 た神の在界も出末る其<sup>が</sup>形塑的に形あるも  
 のとして見むとし、<sup>た</sup>カンテの神曲やト  
 イマス、アクリテスの神學には著しく此傾向  
 が顯れてみふ、即ち在末の在、<sup>その</sup>神の在界

必ずしも調和があるものとは考へない。寧ろ  
 各個人は独立せる目的を以て行動するが故に、  
 自ら其間に利害の衝突があり争ひを生ぜざる  
 を得ぬものと考へ、従つて是等の闘争を押へ  
 て全体の統一を計る力が必要なりと考へ、  
 である。即ちギリシアの如き普遍主義一邊  
 非ありて、より多く個別主義の要素を認めら  
 れる。此普遍主義と個別主義との調和をマキ  
 ヤが、ソは全現存の人間たる英雄の偉力に  
 求め、  
 従つて彼の描き出す社会の構造は、

一 極端な融合特製

皇も、  
 見做す  
 皇と見做すに到つたものである。  
 (二) 斯の如くマキヤがソの學説はギリシア  
 的要素の高調と見得るのであるが、彼はギリ  
 シヤ人の如く吾々の天賦の素質を完全に發展  
 せしむれば、其間に自ら完全なる調和が得られ  
 るとは考へなかつた。之を國家生活について  
 見ると、フロレンツの如く、  
 各々独立して存在するが、且又特別の使命を  
 有するとは認めざるが、其各個の市民間に

然と律せよとする。著しく合理的な傾向があることか認めらるるであらう。

(三) 斯の如くマキヤがエリの考への中にはギリシヤの普遍主義と又カ、ローマの個別主義の必要素が含まれらるる如、<sup>其の點</sup>個別主義を捨て下して普遍主義を生かすこと——即ち各個人を維持者と認め、之を規整して *virtu ordinata* とすること。は君主の力によつて ~~此の意味に於て君主は技術者である~~ 此職務を盡すを為に ~~君主は各市民の~~

カトリック教會のそれと同様に、本末別に存在する個人が一定の力によつて一つの集合体に結いつけられ、其中に於て各人<sup>人</sup>は一定の職務を盡すといふことになるが、その集合統一する力は神に作らしめ人びる實に特色が存する。斯の如く普遍主義と個別主義の調和は ~~此の點~~ 藝術に於ても ~~見られ~~ 得ると思ふ。

即ち ~~此の點~~ 藝術に於ては自然の間に繪を描かば、調和が得られ趣があるに對して、文芸復興期の藝術に於ては透視法とか鈞正とか云ふやうな抽象的な原則を以て自

求めそのと異ると二つである。此意味に於て  
マキヤがエリハ思想はギリヤ化され、  
マ文化の復興とも見ると得べく、又キリスト  
教の中に含まれる動きの分子の顕れとも見  
るこゝが出来る。斯の如きマキヤがエリの考  
へは所謂自然科學的思想に近しいものである  
が、全くその同一のものである。即ち彼  
は不可分の個人を行動の単位と見做すこと  
から、個人間の補完的行為に分解して、  
的の行為から引離され、個々の行為を理性

一橋大学組合特製

人に國家學說が専ら國家の靜的構造の本質を  
動きの間の法則としてあり、此處がギリヤ  
民は必死的に君主の欲するに備へて動くといふ  
術者として理想的社會を造る為に合理的に身  
へう小を法則として従つて政治を行はば市  
置かねばならぬ。此即ち necessity とは君主が  
謀術數、己むを得ざる場合には暴力を用いて  
市民を必死的にさうせざるを得ぬ状態に  
に necessity を見出し、或いは賞罰、或いは權  
力と fortuna の趣くと二つを調察して其間

ギャに解消することばバロウの芸術に至つて  
 却めて行はれたのである。  
 社  
 社會を組立てむとする技術者としてのマキ  
 やガイの地位は大体此所以上の如きにあると思ふが、  
 是からの問題は、は、自然界の事物を人間の爲  
 に利用せむとしは、文芸復興期の技術者達は、  
 如何なる程度に於て、又如何なる方法によつ  
 て自然を支配せむとしるかを見るにある。イ

乃至は之を契機として發せる自然の神祕なる運命は如何なる運命を以て自然に對したか

の平直に移して——其向に法則を求めぬと云  
 ふ所謂分析 (Analysis) の方法を用以て、  
 人間の型、Personnaの型を求め其向に法則性  
 を求めぬのである。此所に不可分の個体を認  
 むる文芸復興期の特徴が表れぬ。即ち人  
 を動きと観察しつゝも猶是を主体に分解せし  
 めて見てぬるル餘ッセンスの藝術が形の構  
 造を見るに作ちして、抑へる力、押す力を具  
 体化するやうな形の構造の向に調和と見てぬ  
 るのと同じ趣がある。形を全く動きの向のり



様である。自然研究に於ては研究の對象が  
 人間でない為に個体としての性質を見る必要  
 が人間程強くない。従つて個々の現象の間に  
~~因果的~~法則を見出すこと、即ちその因果的  
 に結びつけることが比較的容易であるが為  
 に、マキヤ空りから十世紀の初めに立つて  
 ぬちやうな地位、即ち個人乃至は来るを備  
 に型 (Typen) を以て捕へると云ふ地位は、自然  
 科学に於ては既に十五世紀後半に於て脱却さ  
 れてゐる。自然科学の鼻祖と稱せらるるレオ

タリヤに於ける自然科学の發達は、ギリシヤ  
 に於けるが如く、~~自然を~~理解せむとする理論的  
 な動機より出發せるものではなく、如何にし  
 て自然を利用し得るかと言ふ技術者の態度か  
 ら發展したことはマキヤ空りの國史學說と  
 趣を等しくする。又自然を支配せむが為に其  
 法則を求むるに當つて、先づローマ帝政時代  
 の傳統を復活し來り、それを新しい要求に造  
 り替へてゐる間に全く性質の異つたものが生  
 じて來たと云ふ小卓に於てもマキヤ空りと同

ルアンガロ (Michelangelo 1475-1564) 等が古  
典主義を完成したのは一五一〇年頃であり、  
一五三〇年頃にはこのルアンガロは動きを主  
とするパロク芸術に移る萌芽を弄しこぬる  
（一五四一年作の「最後の審判」は明白にパ  
ロク芸術と同傾向にあるものと言ひ得る。）  
先づ自然科学に「いそぎ」の眼を向けると  
にしよう。

横濱製紙株式会社製

ナルト・ガ・ガイニチ (Leonardo da Vinci  
1452-1519) コペルニクス (Nicolas Copernicus  
1473-1543) はマキヤヴェリ (1469-  
1527) と同時代であるが、彼等に於ては  
既に今日の自然科学的思考法が明白に表れ  
居り、其後百年<sup>後の</sup>ガリレイ (Galileo  
1564-1642) ケプレル (1571-1630) 等に  
つて自然科学的方法は確立せられた。  
意味に於て兩者の中間に立つ芸術の方面に於  
ては、ラファエリ (Raphael 1483-1520) 等